様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８０８９５

研究課題名（和文）学級力セルフ・アセスメントシステムを活用したプロジェクト教授法の開発と評価

研究課題名（英文）Development and Evaluation of Project Based Pedagogies Using the Self-Assessment System of Classroom Competencies

研究代表者
田中　博之（TANAKA, Hiroyuki）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：２０２０７１３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、児童生徒が自らの学級の状態を示す「学級力アンケート」の結果を可視化して活用し、プロジェクト学習の中で共同的に学級力向上に取り組むためのレーダーチャート表示システムの開発及びそれを用いた教師の教授法の開発を行った。すでに研究代表者が2011年に実施した予備的な研究により開発したプロトタイプ版を高度化し、さらに統計的妥当性と信頼性の向上によるアンケート調査の標準化と科学的知見の集積、さらに、全国の小中学校での実証研究を通したシステムの評価・改善を行った。

研究成果の概要（英文）：The results of this research were as follows;
1) Development of the Classroom Competencies Questionnaire for school children,2)Development of the Radar Chart Display Program, 3) Pedagogical Knowledge Base to direct teaching and learning to grow classroom competencies

研究分野：教育工学、教育心理学、教育学

キーワード：学級力　プロジェクト教授法

１．研究開始当初の背景

学校現場においては、学級崩壊が多発する中で、また、程度は小さくても学級でのいじめやけんかが頻発する中で、教師たちは支え合い認め合う学級づくりに悩み、そして腐心している。それは、どの教師にとっても授業づくりよりも体力と精神力を必要とする加重負担になっている。その一方で、平成２３年度以降、小中学校において新しい学習指導要領が全面実施となり、「言語活動の充実」を通して「活用を図る学習活動」をどの教科の授業においても導入することが求められるようになり、例えば、国語科においては創作表現が、そして算数科においては活用問題の解決が子どもたちの活動内容として必修になった。しかし、そのような高度な学習は、小中学校において小集団や学級全体でのより一層の肯定的で建設的な人間関係の確立を必要としている。

こうした小中学校での学級経営を巡る２つの実践的な緊急性は、新たな学級経営に関する科学的な知見に基づく効果的な教材や教授法の開発を求めているといえる。そこで、研究代表者は、新たに「学級力」という学級内の子どもたちの目標達成意欲やコミュニケーション状況、人間関係、そして規範意識の状態を示す概念を定義し、それをアンケート方式で子どもが自己評価するための質問紙を開発してきた。また、全国の小中学校における１７５クラスを対象とした研究において、学級力スコアと児童生徒の読解力や教科学力（算数・数学及び国語）との高い相関関係を見いだした（田中、2007）。さらに、この先行研究の知見を受けて、上記の「学級力セルフ・アセスメントシステム」のプロトタイプ版をいくつかの学校の協力を得て開発し、実際の授業で実施して、その実践的知見を収集した（田中、2010）。その結果、この「学級力セルフ・アセスメントシステム」を活用したすべての学級で、学級力スコアが向上した。

本研究では、この先行知見を学術的に確立するために、プロトタイプ版の高度化を、より統計的に信頼性の高いアンケート・ツールを用いて、実証フィールドでの検証を通して達成することをねらいとするものである。

２．研究の目的

本研究は、小中学校における学級経営の新しい教授法を開発することをねらいとしている。そこで、学級の児童生徒が「学級力アンケート」と呼ぶ調査を主体的に実施し、その結果をレーダーチャート形式で可視化して表現する「学級力セルフ・アセスメントシステム」を活用して、特別活動や総合的な学習の時間において、「学級力向上プロジェクト」に取り組むことを通して自律的に学級力を向上させる、プロジェクト教授法を開発することを目的とする。

３．研究の方法

本研究では、次のような５点を柱とする研究を実施する。１）文献研究による学級力概念及びプロジェクト教授法の先行研究の整理、２）学級経営の研究者へのインタビューと資料収集による最新の学級経営の研究知見の整理、さらに本研究成果への評価意見の収集、３）「学級力アンケート」の評価尺度の再構成、４）「学級力レーダーチャート」の高度化、５）学級力向上のためのプロジェクト学習を実践するプロジェクト教授法の開発の５点である。以上の研究成果を研究報告書だけでなく、「学級力向上プロジェクト実践マニュアル」(DVD 付き)として完成する。初年度には、この中で、1)、2）前半、3)、４）を実施する。２年度目以降は、２）後半及び５）を実施し、最終年度に「実践マニュアル」にまとめる。

４．研究成果

まず、学級力アンケートを完成することができた。学級力アンケートは、小学校低学年版、小学校中学年版、小学校高学年版、そして中学校版の４種類である。また、それらに対応した学級力レーダーチャート作成ソフトを、Microsoft 社のエクセルを利用して開発した。

次に、学級力向上プロジェクトのプロセスモデルを明らかにした。学級力向上プロジェクトは、学級力を向上させるために、子どもたち自身が学級力アンケートを実施してクラスの実態を客観的にとらえ、その診断結果を基にしてクラス全員で学級力向上のための取り組みを実践しようというプロジェクト学習である。

いいかえるなら、学級力向上プロジェクトとは、学級力アンケートによる学級力の自己評価、学級力レーダーチャートを基にして話し合うスマイルタイム、そして学級力向上のために子どもたちが主体的に取り組むスマイル・アクションという３つの活動を、１年間の R-PDCA サイクルに沿って意図的・計画的に実践する協同的な問題解決学習である。

その流れは、以下のようなステップとなることが実践分析と教師インタビューの結果から明らかになった。できれば、各学期でこのサイクルを一回実施するとよいだろう。

【学級力向上プロジェクトの流れ】

（左端の英字は、R-PDCA サイクルの各段階）

Ｒ　「いいクラスってどんなクラス？」というテーマで話し合う（スマイルタイム）

Ｒ　第１回学級力アンケートを実施し、学級力レーダーチャートを作成する

Ｒ　レーダーチャートを見ながら学級力を診断する（スマイルタイム）

Ｐ　学級力を高める具体策（スマイル・アクション）を決める（スマイルタイム）

Ｄ　朝の会、授業中、休み時間、帰りの会などで、スマイル・アクションを実施する

Ｃ　第２回学級力アンケートを実施し、学級

力レーダーチャートを作成する
C　レーダーチャートを見ながら学級力を診断し改善策を考える（スマイルタイム）
A　朝の会、授業中、休み時間、帰りの会などで、スマイル・アクションを実施する
　最後に、学級力向上プロジェクトを推進するプロジェクト教授法として、次のような子ども主体の多様なアクティビティーを、R-PDCAサイクルのD段階に位置づけて実施することが効果的であることがわかった。
１．掲示系　目標や決意、標語、学級力レーダーチャートなどを教室内に掲示することにより、子どもたち一人ひとりに学級力向上についての意識を高める。
○学級憲法や学級決意を作成して、教室に掲示する。
○今月の学級力のめあてを短冊に書いて掲示する。
○学級力コーナーに最新のレーダーチャートを掲示する。
○学級力標語を一人ひとり作って貼り出す。
２．記録系　スマイル・アクションの実践記録を定期的につけることにより、実践へ向けての意欲を高める。
○教室の後ろに、「今日の MVP さん」を書き出す。
○「自分プロジェクト」で実行したことをグラフにする。
○「学級力の木」に、できたことをカードに書いて貼る。
３．ほめほめ系　スマイル･アクションの実践に積極的に取り組んだ人を認め合うことにより、認め合う心を育て実践の意欲化につなげる。
○教室の後ろで、一人ひとりにほめほめカードを貼る。
○帰りの会で、「今日の MVP さん」にみんなで拍手する。
○学級力ワークシートに、友だちからのカードを貼る。
４．サイン系　課題のある行動に対して友だちや自分にサインを送り合うことにより、改善への積極性を生み出す。
○おしゃべりがうるさくなったら、グーのサインをする。
○椅子シーソーをしていたら、パーのサインをする。
○机の左上に、自分へのメッセージを貼り付けておく。
５．ポイント系　スマイル･アクションを目標通りに実践できたときに、ポイントを貯めていくことで実践への意欲を高める。
○目標通りに取り組みができたときにポイントをもらう。
○ポイントが基準を超えたときに約束のご褒美をもらう。
○ポイントの基準やご褒美の内容をみんなで決める。
６．体験系　学級力を高めるために効果的な体験活動やワークショップを主体的に実践し、さらなる学級力の向上を図る。
○学級力を高めるお楽しみ会や学級祭を企画・実施する。
○怒りを静めるワークショップを体験する。
○仲間づくりのワークショップを体験する。
○クラスで団結して、ボランティアを実践する。
７．行事系　行事の目標に学級力向上を関わらせて、意欲化につなげる。
○学校行事について学級力向上をめあてとして頑張る。
○行事のめあてを決めて、バナーに書いて掲示する。
８．ものづくり系　学級力新聞の発行や、クラスソング、アートポスターの制作を通して、多様なスマイル・アクションの推進への意識を高める。
○学級力係が中心となり、学級力新聞を発行する。
○一人ひとりで、学級力はがき新聞を定期的に発行する。
○ペーパーピラミッドづくりなどを班で体験する。
○学級力の歌や俳句、短歌、詩などを作って味わう。
○学級力アートポスターを制作して、教室内に貼る。
○学級力壁新聞を制作して、廊下に貼る。
９．話し合い系　スマイルタイムにおける話し合いや、道徳の時間で学級力の大切さを深く考えさせることにより、合意形成を図りながら、学級力向上への意識をもたせる。
○スマイルタイムで、学級力アンケートをとる。
○スマイルタイムで、レーダーチャートの診断をする。
○学級力を高めるアクションを決めるための会議を開く。
○道徳の時間に、学級力の大切さについて深く考える。
10．お祝い系　学級力向上の目標が達成したことを学級全員でお祝いすることにより、学級力向上プロジェクトの達成感を味わわせる。
○目標を達成したときに、給食の牛乳で乾杯する。
○今月の目標が達成できたときに、くす玉を割る。
○学級力向上発表会を開いて、成果発表をする。
　さらに、スマイルタイムの進め方と、指導上の留意点という２つの観点からプロジェクト教授法の特徴を実践事例の分析と教師インタビューの結果から明らかにすることができた。
【スマイルタイムの標準的な進め方】
①　学級力レーダーチャートを貼り出して、その成果と課題について一人一人がワークシートに自己診断を記入する。
②　自己診断の結果を出し合い、黒板に貼り

出しているビッグ・チャートの上に書き込んでいく。
③　学級力の高い項目や前回に比べて伸びた項目について、ほめ合う。
④　逆に、学級力の低い項目や前回に比べて低くなった項目について、課題としてとらえて、その原因を探る。
⑤　学級力を高める取り組みのアイデアを出し合い、今週・今月の取り組み目標を決定する。
　以上の５つのステップは、あくまでも原則的なものである。学級の状態や学級担任の意図によって、柔軟に変更することが望ましい。
　さらに、指導上の留意点をあげると、次のような８つのポイントにまとめられる。こうした十分な配慮と工夫のもとに、充実したスマイルタイムを実施することが必要である。
【スマイルタイムにおける指導上の留意点】
①　学級力レーダーチャートを黒板に貼り出すときには、期待感を持たせたり、予想のつぶやきを出させたりして、参加意欲を高めるようにする。
②　学級力の課題について考えるときには、友だちの名前を出さないようにする。また、課題の改善のために「罰」を中心とした取り組み例を採用しないように配慮する。
③　自己診断のための個人別ワークシートや、班での協同的な診断のためのミニ・ホワイトボード、そして学級全体での診断結果をまとめるビッグ・カルタなど様々な表現ツールを用いるようにする。
④　子どもたちの自己診断力が育っていない段階や、逆にスマイル・アクションの選定に時間をかけたいとき、あるいは集中して一つの課題について考えさせたいときには、重点的に診断・分析する領域や項目を絞り込んでよい。
⑤　一人一人の自己診断力が付いてきたときには、生活班などの小集団での診断・分析にすぐに取り組ませてもよい。
⑥　小学校高学年からは、少しずつ子どもたちがスマイルタイムの司会を務めることができるようにするために、また学級全体の討論力や対話力を育てるために、道徳や特別活動、総合的な学習の時間などで育てた話し合う力を活かすようにする。
⑦　いじめの発生、課題のある子の転入、特定の子どもの反社会的傾向の高まりなどが原因で、学級力が大きく下がったときには、スマイルタイムを実施しなくてよい。
⑧　学級力が、子どもたちの取り組みの努力によって大きく伸びたときには、ほめ合いや、お祝いの雰囲気を出して盛り上げるようにする。

〈引用文献〉
田中博之他監修『「読解力」を育てる総合教育力の向上にむけて』ベネッセ教育研究開発センター、2007 年
田中博之著『学級力を育てるワークショップ学習のすすめ』金子書房、2010 年

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計１件）
①蛯谷みさ・田中博之「小学校５年における学級力向上プロジェクトの開発と評価」『早稲田大学大学院教職研究科紀要』査読有、第７号、2015 年、pp.59-88
〔学会発表〕（計１件）
①田中博之「学級力向上プロジェクトにおけるスマイル・アクションの分類」日本教育工学会第 31 回全国大会自由研究発表、2014 年 9 月 20 日、岐阜大学（岐阜県）
〔図書〕（計１件）
①田中博之編著『学級力向上プロジェクト２』金子書房、2014 年

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　博之（TANAKA, Hiroyuki）
早稲田大学大学院教職研究科・教授
研究者番号：20207137

(2)研究分担者
土屋　隆裕（TSUCHIYA, Takahiro）
統計数理研究所データ科学研究系・准教授
研究者番号：00270413